

死刑映画週間

「死刑の映画」は「命の映画」だ

犯罪や、その結果としての死刑という処罰方法は、
私たちの日常と遠くかけ離れたものだろうか？
世界じゅうの映画監督や作家が、
犯罪や死刑をテーマに優れた作品を創造してきているのは、
それがけっこう、社会が抱える身近な問題だからではないだろうか。

映画＋監督＋制作年＋語る人（一回限り、裏面参照）

『私たちの幸せな時間』（ソン・ヘソク 2006）×雨宮処凛

『真幸くあらば』（御徒町風 2010）×小嵐九八郎

『エロス＋虐殺』（吉田喜重 1970）×吉田喜重

『帝銀事件 死刑囚』（熊井啓 1964）

『BOX 袴田事件 命とは』（高橋伴明 2010）×森 達也

『絞死刑』（大島渚 1968）×足立正生

『サルバドールの朝』（マヌエル・ウエルガ 2006）×佐藤 優

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（ラース・フォン・トリアー 2000）

『ライフアーズ』（坂上香 2004）

『休暇』（門井肇 2008）×香山リカ

2012年 2月4日(土)～2月10日(金)

渋谷 ユーロスペース